

伊豆大島の火山活動解説資料（令和 7 年 9 月）

気 象 庁 地 震 火 山 部
火山監視・警報センター

9 月 9 日から 10 日にかけて伊豆大島の西方沖を震源とする地震が増加しましたが、11 日以降、地震回数は減少しています。過去にも地震活動が一時的に活発化したことがあり、今回も同様の活動と考えられます。熱活動は低調に経過し、火山性微動も発生しておらず、ただちに噴火が発生する兆候は認められません。地下深部へのマグマ供給によると考えられる 1986 年の噴火以降の長期的な島全体の膨張は、2018 年頃からほぼ停滞しています。これまでに供給されたマグマは地下深部に蓄積されていると考えられることから、今後火山活動が活発化する可能性がありますので、火山活動の推移に注意してください。

噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）の予報事項に変更はありません。

○ 活動概況

・ 噴気など表面現象の状況（図 1－①②、図 2－①、図 5～8）

北西外輪監視カメラによる観測では、剣ガ峰付近や三原山中央火孔などで弱い噴気が時々認められています。これらの噴気活動に特段の変化はありません。9 日及び 25 日に実施した現地調査では、三原山山頂周辺の噴気温度や三原山山頂火口内及びその周辺の噴気や地熱域の状況など熱活動に特段の変化は認められませんでした。

・ 地震や微動の発生状況（図 1－③、図 2－②③、図 4）

9 月 9 日から 10 日にかけて伊豆大島の西方沖を震源とする地震が増加しましたが、11 日以降、地震回数は減少しています。過去にも地震活動が一時的に活発化したことがあり、今回も同様の活動と考えられます。

この地震活動に伴うカルデラ内の地震の増加は認められず、火山性微動も観測されていません。今期間、震源は西方沖の他にカルデラ内の深さ 1～4 km 付近に分布しました。

・ 地殻変動の状況（図 1－④、図 2－④～⑥、図 3、図 9）

GNSS 連続観測などによると、地下深部へのマグマの供給によると考えられる 1986 年の噴火以降の長期的な島全体の膨張傾向は、2018 年頃からほぼ停滞しています。約 1～3 年周期で膨張と収縮を繰り返す地殻変動は、2025 年 9 月頃から概ね停滞しています。

この火山活動解説資料は気象庁ホームページでも閲覧することができます。

https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php

次回の火山活動解説資料（令和 7 年 10 月分）は令和 7 年 11 月 11 日に発表する予定です。

資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.jma.go.jp/jma/kishou/now/kazan/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、国土地理院、東京大学及び国立研究開発法人防災科学技術研究所のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の『数値地図 50m メッシュ（標高）』『数値地図 25000（行政区・海岸線）』『電子地形図（タイル）』を使用しています。

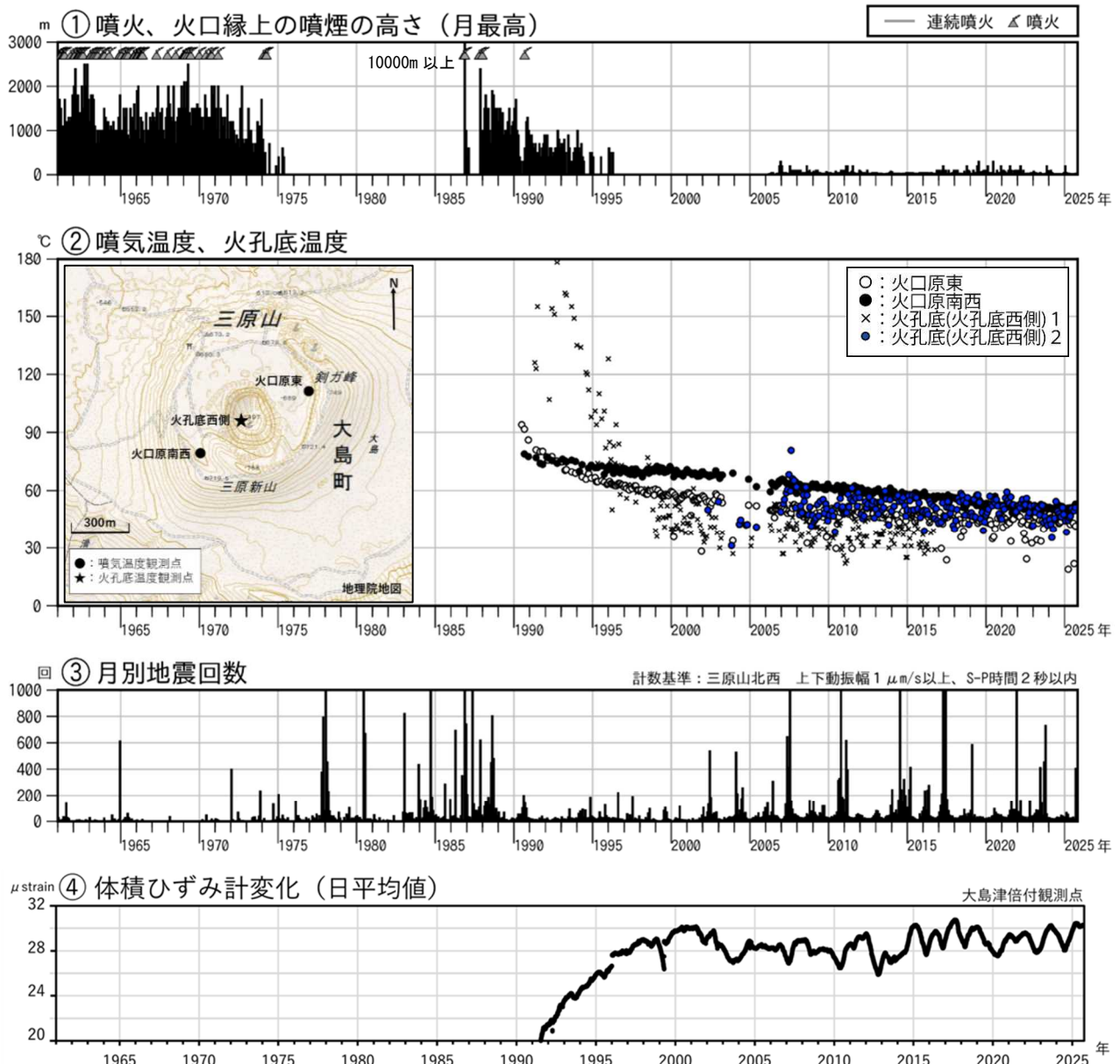


図1 伊豆大島 長期間の火山活動経過図（1961年1月～2025年9月）

- ① 1991年12月18日までは火口縁上130m以上、2002年2月28日までは火口縁上300m以上の噴煙の高さを観測していました。2002年3月1日以降は北西外輪監視カメラでの常時観測における噴煙の高さの月最大値を示しています。
- ② 火口原東、火口原南西：デジタル温度計により直接測定した噴気温度。
火孔底（火孔底西側）1：赤外放射温度計により離れた場所から測定した火孔底温度。
火孔底（火孔底西側）2：赤外熱映像装置により離れた場所から測定した火孔底温度。
- ③ 1965年5月24日までは津倍付観測点（旧大島測候所）で、1965年5月25日から2002年2月28日までは津倍付観測点から約1km離れた観測点で、2002年3月1日以降は三原山北西観測点で計数された地震回数を示しています。地震回数には伊豆大島周辺海域で発生した地震も一部含まれています。
- ④ グラフの空白部分は欠測を示します。センサ温度変化によるみかけの変化及びトレンド除去を行っています。

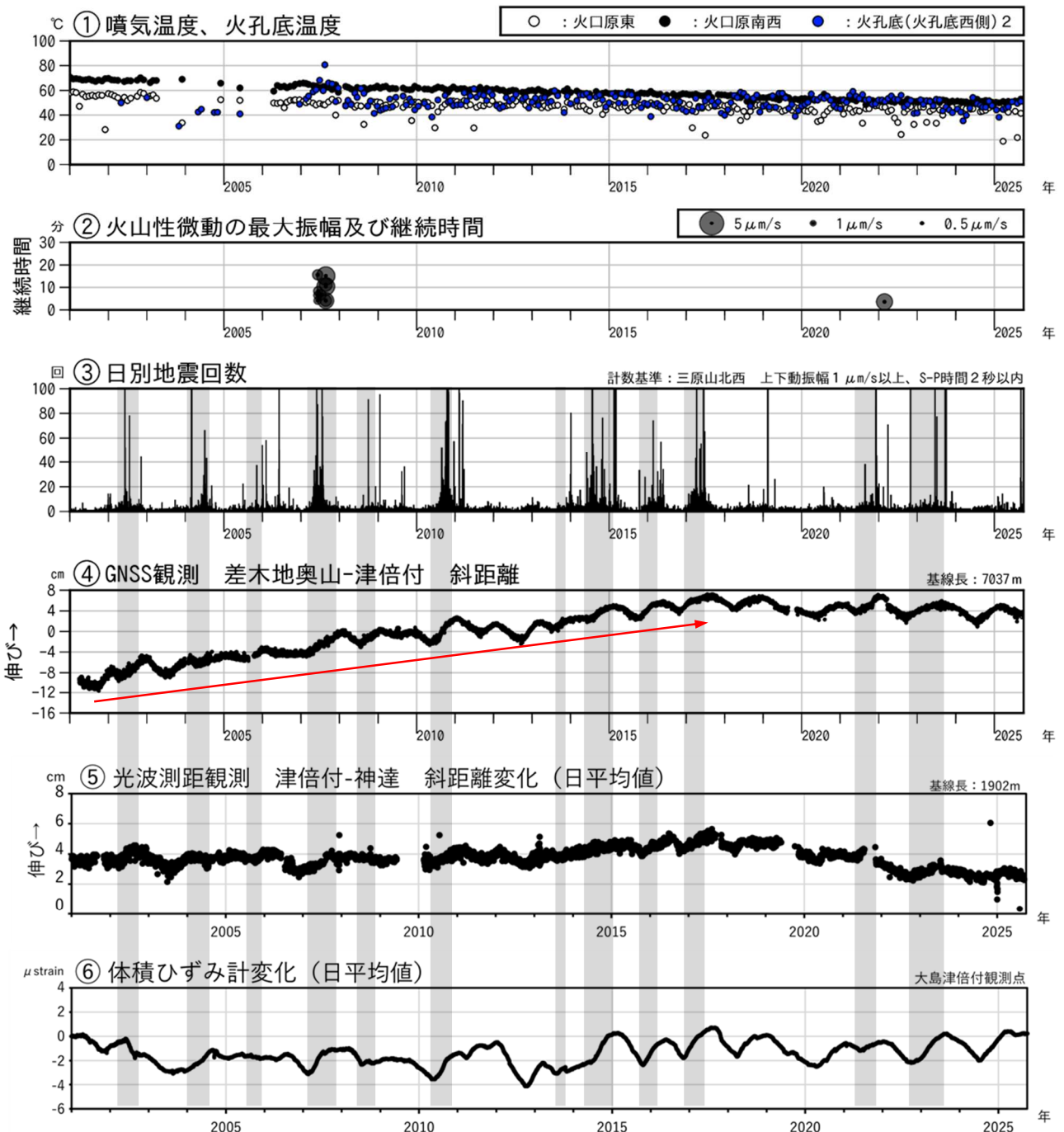


図2 伊豆大島 最近の火山活動経過図（2001年1月～2025年9月）

- ① 火口原東、火口原南西：デジタル温度計により直接測定した噴気温度。
火口底（火口底西側）2：赤外熱映像装置により離れた場所から測定した火口底温度。
- ② 三原山北西観測点（上下成分）で計測された火山性微動の最大振幅と継続時間を示しています。
2007年6～8月にかけて発生した火山性微動については、北山麓で発生したと考えられます。
- ④ 図9のGNSS基線②に対応。グラフの空白部分は欠測。2009年12月25日に差木地奥山観測点の支柱工事を実施しています。2010年10月及び2016年1月に解析方法を変更しています。
- ⑤ グラフの空白部分は欠測。2010年2月17日及び2021年11月10日に機器を更新しています。

- ・ 長期的な島全体の膨張傾向（④の赤矢印）に加え、約1～3年周期で膨張と収縮を繰り返す短期的な地殻変動もみられ、膨張がみられる時期に、これと関連すると考えられる地震活動の活発化がみられることがあります（③④⑤⑥の灰色部分）。
- ・ 体積ひずみ計変化にはGNSS観測と光波測距観測の斜距離変化に対応した周期的な変動がみられ、2025年7月頃から停滞しています（④⑤⑥）。

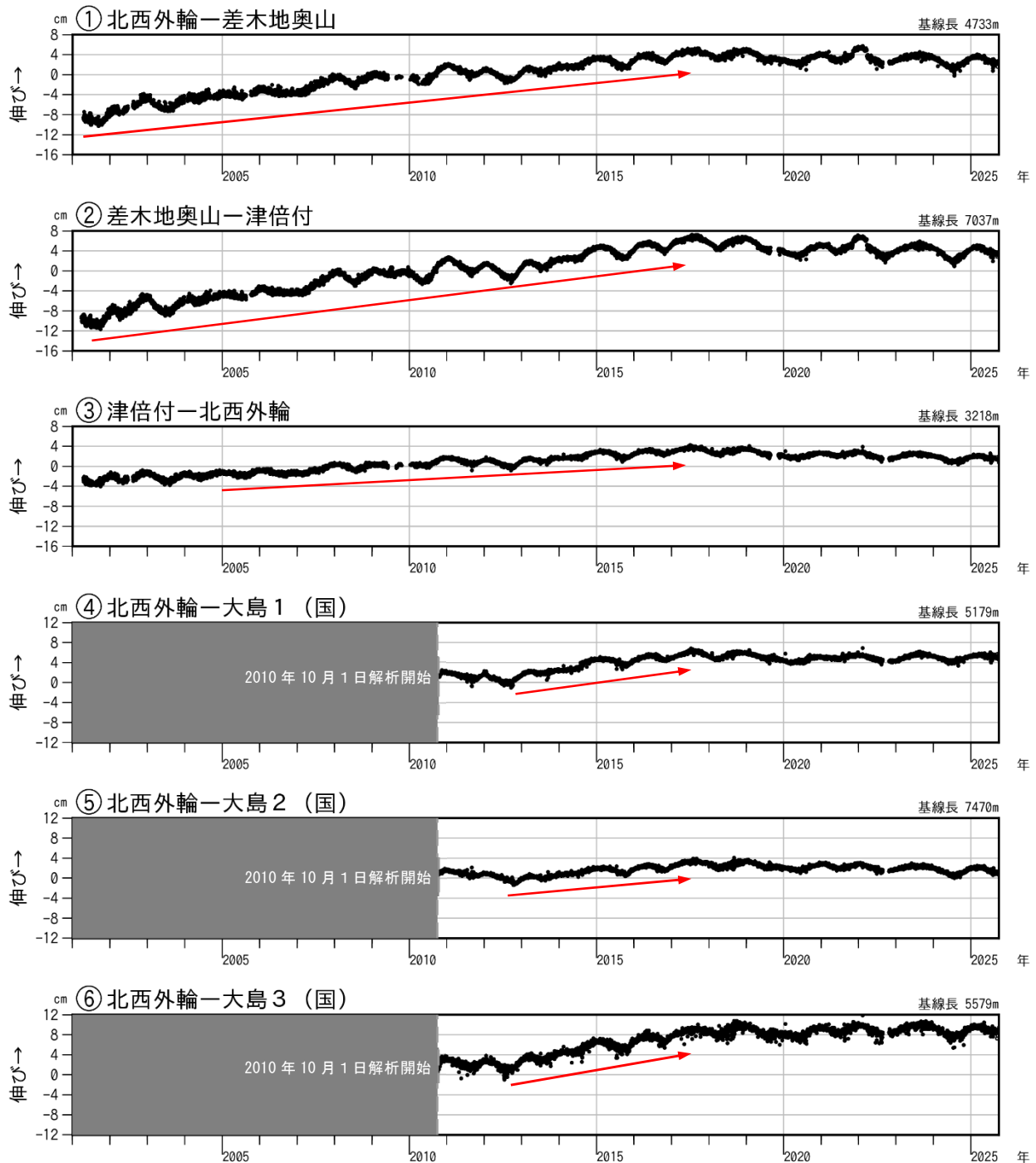


図3-1 伊豆大島 GNSS 連続観測による基線長変化(2001年1月～2025年9月)

(国)：国土地理院、①～⑥は図9のGNSS基線①～⑥に対応、グラフの空白部分は欠測。

2010年10月及び2016年1月に解析方法を変更しています。

2009年12月25日に差木地奥山観測点の支柱工事を実施しています。

- ・地下深部へのマグマの供給によると考えられる長期的な島全体の膨張傾向（図中赤矢印）は、2018年頃からはほぼ停滞しています。

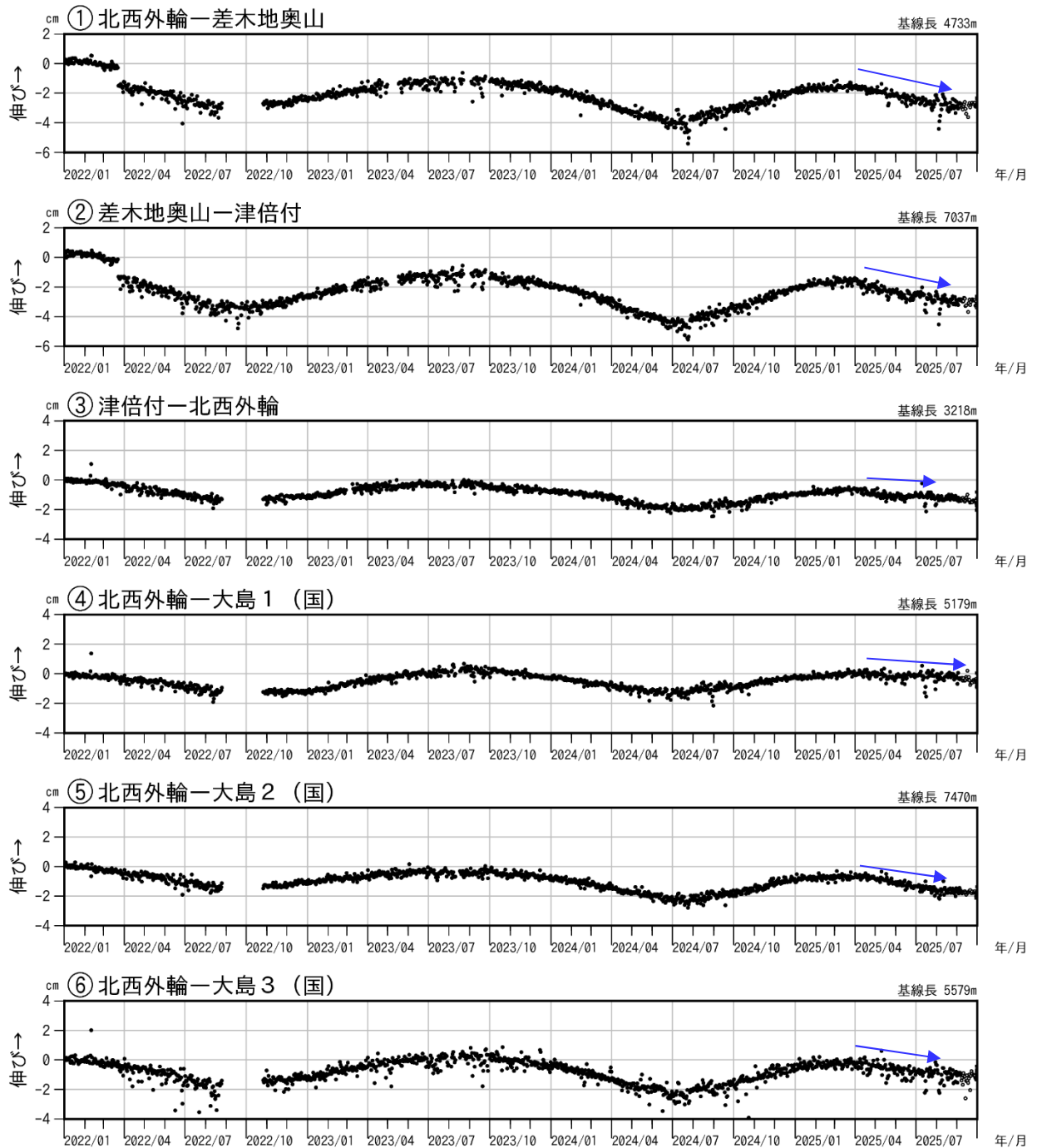


図3-2 伊豆大島 GNSS 連続観測による基線長変化(2022年1月～2025年9月)

(国)：国土地理院、①～⑥は図9のGNSS基線①～⑥に対応、グラフの空白部分は欠測。

- ・約1～3年周期で膨張と収縮を繰り返す地殻変動は、2025年9月頃から概ね停滞しています。

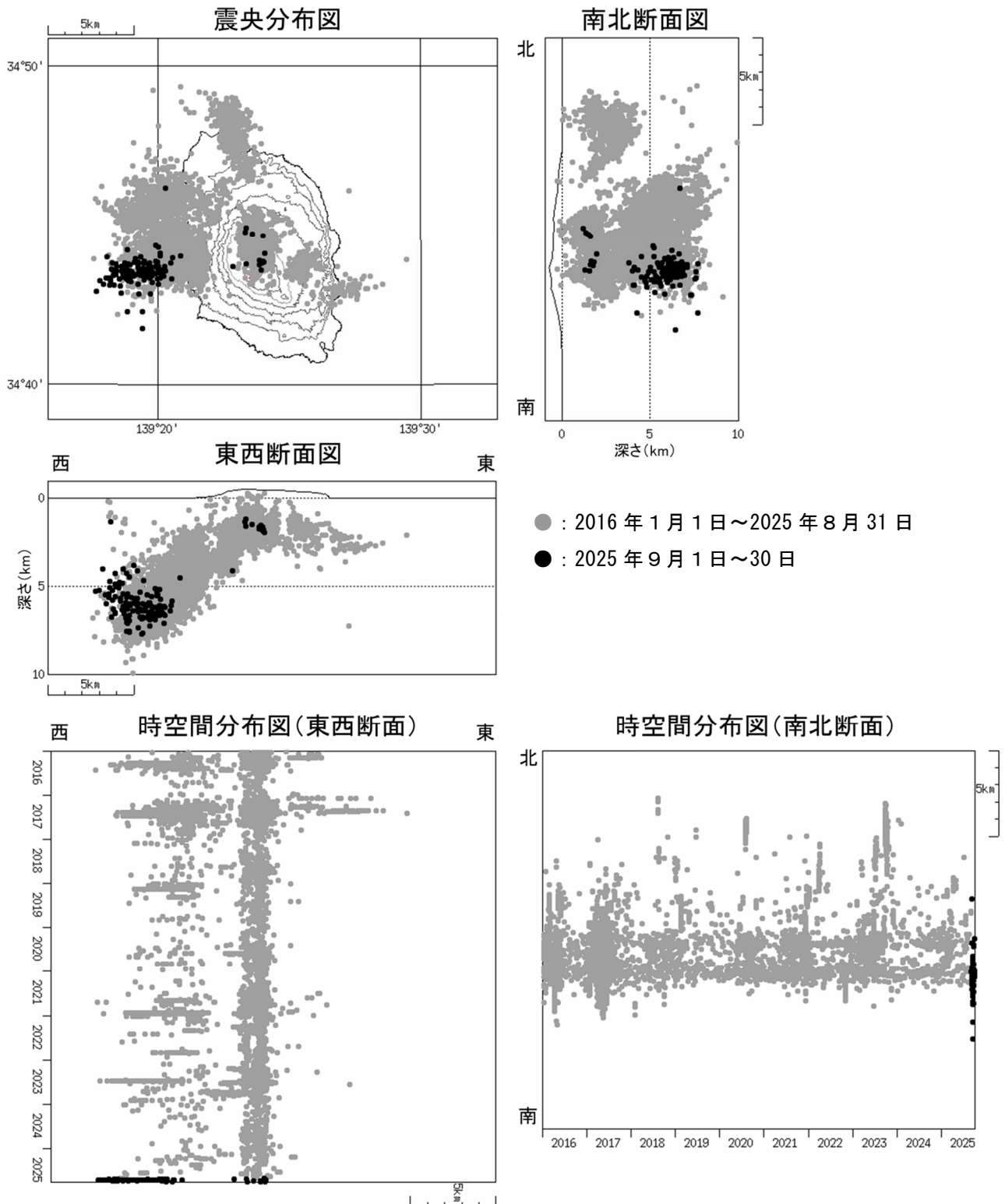


図4 伊豆大島 震源分布図（2016 年 1 月 1 日～2025 年 9 月 30 日）

- ・ 長期的には、地震活動は活発な時期と静穏な時期を繰り返しています。
- ・ 9 月 9 日から 10 日にかけて伊豆大島の西方沖を震源とする地震が増加しましたが、11 日以降、地震回数は減少しています。
- ・ 今期間、震源はカルデラ内の深さ 1 ～ 4 km 付近及び西方沖に分布しました。



山頂部（9月26日、北西外輪監視カメラによる）



剣ガ峰付近（9月9日撮影）

図5 伊豆大島 三原山山頂部及び山頂火口の状況（撮影方向は図8参照）

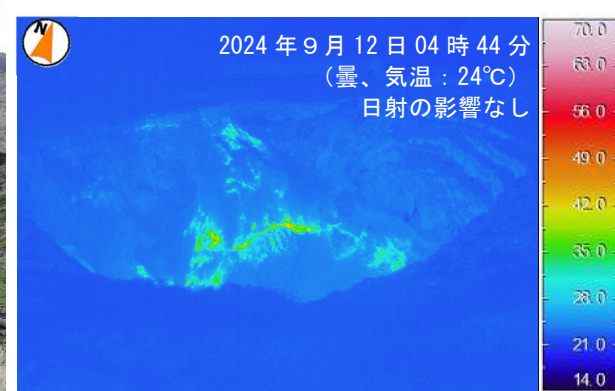
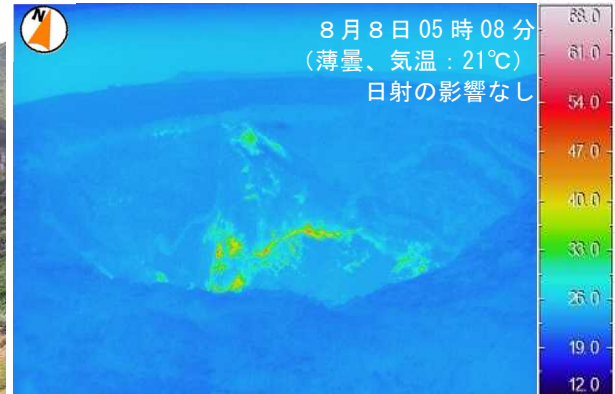
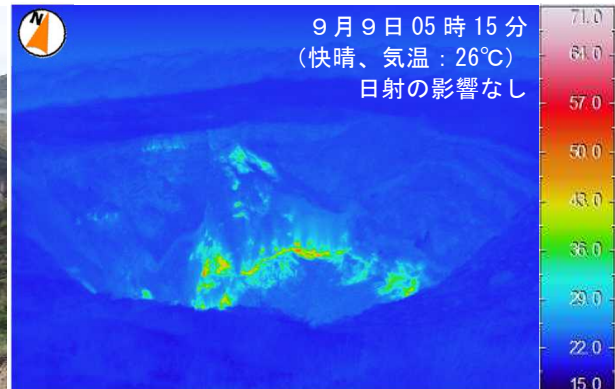


図6 伊豆大島 中央火口内の状況（撮影方向は図8参照）

- ・中央火口内の噴気の状況に特段の変化は認められません。



図7-1 伊豆大島 B2火孔周辺の状況（撮影方向は図8参照）

- ・ B2火孔周辺では噴気活動が継続しています。

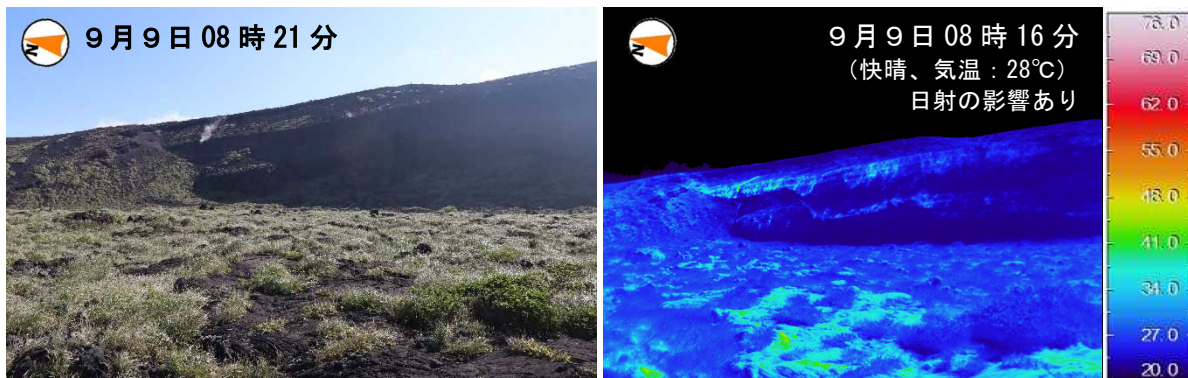


図7-2 伊豆大島 剣ガ峰の状況（撮影方向は図8参照）

- ・ 剣ガ峰では地熱・噴気活動が継続しています。

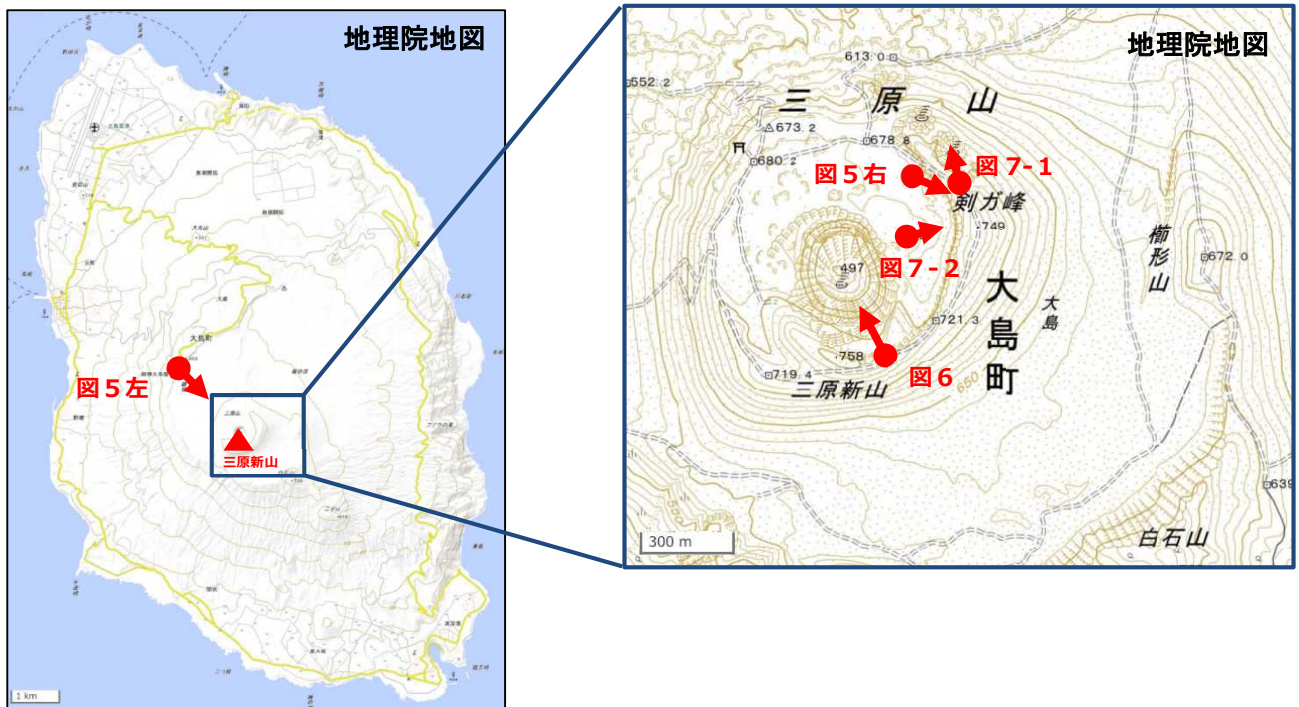
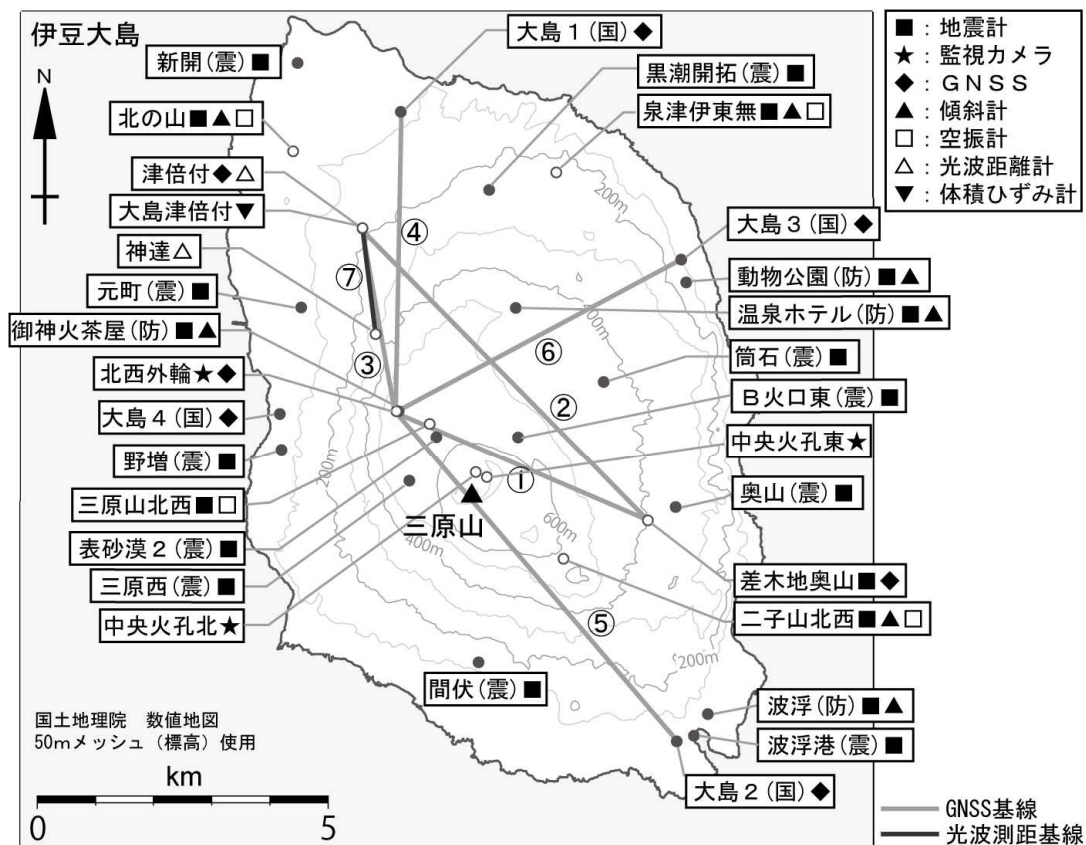


図8 伊豆大島 現地調査での撮影位置・撮影方向、及び監視カメラの位置・撮影方向
(赤丸：撮影位置、→：撮影方向)



小さな白丸（○）は気象庁、小さな黒丸（●）は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
（国）：国土地理院、（防）：防災科学技術研究所、（震）：東京大学地震研究所

図9 伊豆大島 観測点配置図

図中の②は図2のGNSS基線④に、①～⑥は図3のGNSS基線①～⑥に、⑦は図2の光波測距基線⑤に対応。